

# ヤブコウジ *Bladhia japonica* の園芸品種の考察

岡 村 は た

## はじめに

ヤブコウジはわが国の山野に自生する常緑小低木で、各地の林縁の林床に普通である。

栽培の歴史は古く、好事家により観賞用として淘汰され、多くの品種が昔から命名されてきたが、古い文献の中にはヤブコウジ（ヤマタチバナ）の間にツルコウジ、マンリョウ、カラタチバナの名をまじえており、1827年の草木奇品家雅見以前はヤブコウジの品種はさほど記載されていない。これにつづく、草木錦葉集(1829)には、43品種があげられている。

その後の宮沢文吾の観賞樹木(上原・1961)では22品種をとりあげ、遠藤保太郎は卒業論文斑入りの研究(1915)に7品種をとりあげ、中井猛之進の大日本植物誌第9巻ヤマタチバナ(1943)では46品種(変種を含む)があげられている。これにはツルコウジ5品を含むが、くわしくは後述する。次に総合種苗ガイド古典園芸植物編(1967)では37品種、園芸大辞典(1971)には22品種、やまさ園芸カタログ(1980)46品種、長尾草生園カタログ(1981)51品種があげられている。

## 錦葉集43品と中井猛之進の46品

ヤブコウジの品種を語るとき、記載品の多いのは次の2大集成、すなわち、草木錦葉集(1827)と中井猛之進ヤマタチバナ(1943)とである。第1表はこの2つのものを統合したものである。幸い、草木錦葉集解説(1977)にすべての品種に番号が付してある(図のないものもある)ので、この番号を用いて整理した。この欄に番号のないものは錦葉集にはなく、中井が新たに記載したもので、学名欄の空白のものは中井が品種としては認めなかったものである。この表の□のついたものはツルコウジに入れるべきと考えられるもので錦葉集の本文にその

ことが記載されている。○のついたものは小葉で、var. *minor* に入れるべきものと考え、整理調整して、ツルコウジとその品種名までも比較参考のために登載した。もちろん、日本の園芸植物の品種名が、異種の植物間で同一名のついていることも、しばしばあるのでこの辺りは再考を要するが、今回触れない。錦葉集43品、中井46品(ツルコウジらしいものを含む)の間には114年も経ているが重複するものが非常に多い。この2つを展べて、種、変種、品種の合計をすると45となる。その中には、全録のもの18、ちり斑(多くは plastid 斑と考えられるもの)18、覆輪5、中斑1、模様斑(定形斑)1、複合斑2となる。このうち、今日の栽培品と対合できるものは、ホソバヤブコウジのうちの、鶴沢中斑、鶴沢東雲の2品と、縮緬こうじ、黄斑ちりめんの計4品である。錦葉集の中の品種の18は、L II、L IIIの形質がちり斑型で、今日の御宝錦、御代錦、御幸錦、白王錦、蒼錦、三笠錦のいずれかに相当するもの含まれているであろうことは予想されるが、葉形の鮮明な特徴が不明で、また、鋸歯の様子も記載がほとんどなくわかりにくい。また、L IIは極めて分担の狭いものが多いので、これが昔の人々に注意されず記載もれのことも多いと考えられる。また、これらL IIIの斑部はいずれも図から判断して、plastid 性のため、栽培上、余程注意して、白枝、緑枝を剪定しなければ、その品種を永く存続することは困難で、今日まで、継続栽培がなされにくかったものと思われる。また、覆輪の中には今日の高輝冠、千代田、枇杷錦、蒼などと考定されるものがあるが1対1には決定しがたい。

## 中井以後の園芸品種

錦葉集のものと同村が今日確認しているものとの間の大きな相違は、錦葉集のものが、ほとんどL IIまたはL II、L III、またはL I~L IIIが plastid 斑らしいものであるのに対して、現代は周縁キメラ品種がほとんどで、

第1表 草木錦葉集および中井・ヤマタチバナの変品種一覧表 (配列は中井による)

通番	種名	変種名	品種名	学名	復刻本 解説番号	中井及錦葉集の記載	考察
1	ヤマタチバナ	ヤマタチバナ		<i>Bladhia japonica</i> var. <i>typica</i>			野生型
2	シロタチバナ			<i>B. j.</i> var. <i>typica</i> f. <i>leucocarpa</i>		果実白く庭園に植える 1781年ツンベルグの記載	アントンシアン形成なし
3	サンシキヤブコウジ (三色紫金牛)			" f. <i>tricolor</i>		葉は緑に白と赤との斑を交ぜ美事 (1932)	
4	アンヨウジシヨク (安養寺職)			" f. <i>variegato-heterophylla</i>	483	葉は長楕円形のもの他、縁は大波状に屈曲する	plastid,
5	カキハ (柿葉)			" f. <i>albo-variegata</i>	484	卵形で白斑あり 長50~60、幅30~35mm	plastid, 御代錦?
6	ムカンノカキハ (昔の柿葉)			" f. <i>longicaulis</i>	485	小葉、つる 首曲り柑子と同品、丈高く伸長枝先は曲る	plastid, 御幸錦?
7	サンエキ (三益)			" f. <i>variegato-microphyll</i>	486	つる、 小葉(長30~40mm、幅15~25mm) 500永絹紅懸(厚もの)	plastid, 御幸錦?
8	タケヤ (竹屋)			" f. <i>variegato-congesta</i>	487	葉長40~50mm、幅25~30mm、竹屋伊右エ門(号は竹園)が所持した。	plastid, 御代錦?
9	カンバチ (勘八)			" f. <i>intermedia</i>	489	万右エ門ことうじと万歳ことうじと勘八ことうじと同名 カマハとタケヤの間型、晩秋に先が紅化する	plastid, 御代錦?
10	ノチクダリヅル (後下り壺)			" f. <i>viridi-punctata</i>	492	508)ともこれと同品、つる 509)長楕円形、両端尖り、白斑あり	plastid 又は核内遺伝子に よるかは不明 またその中に緑色小斑散生
11	スルガチヤラン (駿河茶蘭)			" f. <i>variegato-obovata</i>	497	化物柑子と同品、丸き卵形、央以上に疎鈍歯、白斑 (1815)	plastid, 御代錦?
12	クロノキフコウジ (黒野黄斑柑子)			" f. <i>aureo-variegata</i>	510	小葉楕円形、黄色の斑 央以上に小鋸歯	plastid, 御幸錦?
13	ミヤキフコウジ (間美屋黄斑)			" f. <i>luteo-variegata</i>	507	葉縁は基部以外に疎鈍歯あり、全面大型の黄斑	plastid, 御代錦?
14	ジョウフクリン (上覆輪)			" f. <i>rubro-marginata</i>	513	覆輪、縁は紅包に縁取る べにかけるくりん(紅懸覆輪) 長楕円~長た円披針形	高輝冠? つることうじ?
15	ヤスケフクリン (彌助覆輪)			" f. <i>albo-marginata</i>	514	覆輪、葉は長いが直立、倒披針形、白縁 彌助覆輪、彌助柑子同品	模様斑 マンリョウ、カラタチバナ にあるがヤブコウジには見 ず(横井政人、広瀬嘉道)
16	ツマジロ (爪白)			" f. <i>acroluta</i>	522	爪白、倒卵形、葉先のみ黄、まれに全葉縁取るものを産生	

通番	種名	変種名	品種名	学名	復刻本 解説番号	中井及錦葉集の記載	考察
17			マンキチマルバ (萬吉丸葉)	<i>Bladhia japonica</i> var. <i>typica</i> f. <i>integra</i>	528	全緑、先丸、孔雀柑子同品、楕円状 倒卵形で全縁	現在不明
18			ホホヅキコウジ (酸漿柑子)	" f. <i>macrocarpa</i>	529	朝出奈山一丈づると同様、葉は楕円 形緑色、切れ込み深く、鋸歯あり 果実大型	つるこうじ?
19			ミズノイチジョウヅル (水野一丈蔓)	" f. <i>viridi-lutescens</i>	512	葉は楕円形、帯緑淡黄色の斑あり、 果実は扁球	plastid, つるこうじ?
20			メクラフクリン (盲覆輪)	" f. <i>luteo-marginata</i>	517	覆輪、葉は種々変形し液状の切込あり、 概形は倒披針ないし、長楕円倒 卵形黄色に縁取る	現在不明
21			アザミコウジ (薊柑子)	" f. <i>cirsiifolia</i>	518	葉は狭長50~90mm倒披針形、アザミ の葉のように葉縁には針状に近い鋸 歯あり、縁白く、一面に白斑あり	糸覆輪、中ちり斑、不明 ないのではないか?
22			ヤヒチボロフクリン (彌七襤褸覆輪)	" f. <i>pyrethrifolia</i>	516	葉は丸い倒卵形、菊萼、黄色の縁に 多少紅を加う、果実は、はじめ栗色、 のち紅色となる。	現在不明
23			チャフクリン (茶覆輪)	" f. <i>fusco-marginata</i>	515	覆輪	縁部にもアントシアンがか かり見える。びわにしき (枇杷錦)などの展葉時に は茶色に見える
24			ボロコウジ (襤褸柑子)	" f. <i>polymorpha</i>	519	覆輪、結締柑子も同品か、倒卵形~ 長楕円倒披針形、白ふくりん、果実 ははじめ栗色のち紅色となる	ちよだ。(千代田)、ほまれ (蒼)に似る
25	ヤマタチバナ カマヤマコウジ (鎌山柑子)			<i>Bladhia japonica</i> var. <i>major</i>		1828年岩崎灌園本草図譜 葉は長さ 50~125mm、幅25~55mm、木は太、 果実鮮紅色、次の園芸品種が出た	
26			シタヤシヨク (下谷職)	" f. <i>albo-variegata</i>	482	葉は楕円形、厚い洋紙質、白斑、ち り斑	plastid 御代錦に似る
27			ミスノベニカケ (水野紅懸)	" f. <i>rhodogemma</i>	493	ちり斑、茎は帯紅色、芽は紅色、紅 懸紅柑子ともいう、葉は薄い洋紙質 純白斑	plastid 御代錦に似る
28			ナガシマカマクラ (永島鎌倉)	" f. <i>variegato-inflera</i>	488	鎌倉柑子ともいう、茎は紅、芽は帯 紅色、葉は薄い洋紙質、大形、先に 向いて上に反る、日斑、長70、幅 45mmに達す、葉の幅狭いものをほそ ばかまくらという	plastid 御代錦に似る
29			アサイヅル (浅伊蔓)	" f. <i>variegato-oblonga</i>	491	葉は長楕円形、長55~70mm、茎、芽 ともに紅	plastid つるこうじではないか
30			ウスバ (薄葉)	" f. <i>variegato-papyracea</i>	495	葉は長楕円、薄き洋紙質、白斑	plastid 葉縁の形から白玉錦?

31	オホレイウケバ (大類受葉)		<i>Bladhia japonica</i> var. <i>major</i> f. <i>aureo-variegata</i>	505	黄斑鎌倉もこれに属す、葉は広楕円形、60~70mm、黄斑	plastid
32	スルガマルバ (駿河丸葉)		" f. <i>grassidens</i>	506	幸右エ門黄斑もこれに属す、大類受葉の外形に大型粗鋸歯あり	plastid 御代縮に似る
33	アタカコウジ (安宅柑子)		" f. <i>robusta</i>	536	全緑大葉、茎太く丈夫、葉は厚い、果序は繖形に多果	現在不明
✓	ナガシマカヤマ (永島鎌山)		なし	496		plastid 御代縮?
34	ヤマタチバナ	ホンソバヤブコウジ	<i>Bladhia japonica</i> var. <i>angusta</i>	490	細葉鎌倉、厚板柑子、水野枇杷葉もこれに属す、伊豆大島、屋久島原産(1922)、葉は細く、花序の枝の葉は倒披針形、又は狭披針形、長さ20~50、幅6~20mm、果実は緋紅色の野生又は園芸品種がある	
35	シラマコウジ (白珠柑子)		" f. <i>leucocarpa</i>	なし	1931年中井発表、果実が白色、伊豆大島、本州、樹形はホンソバヤブコウジと同様	
36	ミズノチリメンコウジ (水野縮細柑子)		" f. <i>albo-variegata</i>	501	間の斑縮細柑子もこれに属す、葉は倒披針形緑色白斑あり	plastid 又は核内遺伝子による現在の黄斑縮細と同様か
37	ヨネハチヤボ (米八矮鶏)		" f. <i>pygmaea</i>	524	全緑、矮性節間つままるため、葉は密生、短かく先に丸味あり	
38	ナガシマケジミ (永島芥子実)		" f. <i>microcarpa</i>	531	全緑細葉、葉は倒披針形、長さ30mmに達することまれ、表面平語、小さい種子有す	
39	イマアツイタ (今厚板)		" f. <i>microcarpa-major</i>	不明	全緑、果実はながしまけしみ状、葉は大きく、40mm以上あり	
40	ウザフナカフ (鵜沢中斑)		" f. <i>medio-lutea</i>	521	葉は野生品のようにで中央に縦に黄斑あり	中斑、現在の鵜沢(うざわ)
41	ウザフシノメ (鵜沢東雲)		" f. <i>medio-picta</i>	なし	葉は倒披針形、中央に白き斑あり	うざわの中斑部分がplastidによる斑となる、現在の東雲(しのめ)
42	クロノヒチフクコウジ (黒野七福柑子)		" f. <i>heterodonta</i>	533	全緑、倒披針形、縁には欠刻様々、黒野七変化と同一物	現在不明
43	クメハチリメン (桑八縮細)		" f. <i>rugulosa</i>	525	全緑、暗緑狭倒披針形、しわあり	現在の縮細(ちりめん)
44	コメコウアツイタ (米幸厚板)		" f. <i>longifolia</i>	530	全緑、厚、細葉長50、幅10mm、種々欠刻し、わずかに白斑あり	現在不明
45	ムカンノアツイタ (昔の厚板)		" f. <i>crassa</i>	530	全緑、細葉、野生品より厚い、厚板柑子と同一物	現在不明

通番	種名	変種名	品名	学名	復刻本 解説番号	中井及錦葉集の記載	考	察
✓			ミスノビワバ (水野枇杷葉)	なし	526	全縁, 細葉	現在不明	
46		コバナヤマタチバナ		var. minor	なし	1936年中井, 鈴木が新変種として発表したもの, 葉は繊弱, 広楕円~帯卵広楕円, 長さ20mmをこえる稀, 台湾, 貴州	全縁 他に3品(485, 486, 510) は本種の品種と考えられる	
✓		タカタコウジ		なし	503	小葉	plastid, 御幸錦?	中井がみとめなかったもの
✓		スガモコウジ		なし	502			
1	ツルコウジ	ツルコウジ		<i>Bladhia villosa</i> var. <i>typica</i>	／	本州, 四州, 九州, 済州島, 中国福建, 広東, 湖南に分布する芸品種あり	512, 492, 491, 514, 529 の5品はツルコウジである う。(つることうじは考察し ない)	
2		ナガシマサザハ (永島匙葉)		f. <i>violascens</i>	527	葉は広卵形, 茎は紫, 花は紅色, 果実は紫		
3		オオバツルコウジ		var. <i>reptans</i>	／	つることうじより葉は壮大		
4		エンジュウヅル (遠州つる)		f. <i>albo-variegata</i>	499	うざわつると同一品, 葉に白斑ありのちちざええる, 秋に白斑うるむものをのちちらみぶらちつるといふ		
5		ヤヒチヅル (彌七蔓)		f. <i>albido-variegata</i>	504	葉にうす白い斑がある		
6		コメコウケズル (米幸毛蔓)		f. <i>aureo-picta</i>	511	水野米幸, 亀甲蔓斑と同一品, 葉縁に粗大な少数の鋸歯あり, 黄斑を有す		
7		オキサクラバ (隠岐桜葉)		f. <i>viridi-marginata</i>	534	隠岐柑子と同一品, 葉は広楕円形又は広倒卵形, 白く緑の縁とる		
8		ノチクダリキズル (後下り黄蔓)		f. <i>aureo-variegata</i>	509	葉に黄斑あり, 縁は全長にわたり, 鋸歯あり		
9		センクダリズル (先下り黄蔓)		f. <i>obscura-variegata</i>	508	葉形は前者と同様だが斑は不せん明な淡黄色の斑		
10		リュウキウツルコウジ		var. <i>liukiensis</i>	／	1922年中井新記載 つることうじ状で楕円形と卵楕円形の間に変化, 縁に波状の鋸歯がある, 紀伊, 琉球		
11		キッコウツルホシフ		なし	523			
12		ウザワヅル		なし	498			

(備考 この表の46品に✓印の4品を加え  
□の5品を除いた数が45品となる。)

その各起原層は安定した緑，白，黄，黄緑，緑黄のいずれかである。周縁キメラでないものは54品中にわずか7品である。（第2表参照）

第2表 錦葉集と中井の統合表と岡村の  
確認した品種の型比較表

	全緑	散斑	周縁 キメラ	模様斑	複合斑	合計
錦葉集と中井 との統合	18	18	6	1	2	45
岡 村	2	4	35	1	12	54

この間の変遷を示す入手できた文献は極めて少なく，文献上には，奇品家雅見40(1819)，草木錦葉集43(1827)，中井猛之進46(1943)が類似し，また，古典園芸植物編37(1967)，ヤマサ園芸の目録46(1980)，長尾草生園目録51(1981)の3つが類似し，また，宮沢文吾観賞樹木22(上原より)と最近園芸大辞典22(1971)が類似している。1915年遠藤保太郎は7品を記載した，すなわち，糸覆輪，鶺鴒，紅雪，伊達錦，日の司，紅司，あざみこうじの7品である。この時を境にして，plastid 斑のものに名のつけられた品種名は急激に減少し，周縁キメラ品種の名が多くなる。遠藤のとりあげた品種はすべて周縁キメラであった。もっともこの論文は斑入り表現の研究であったからであろうが，いずれにしてもこの論文には，plastid 斑の品種名は唯の1つも混ってはいないのである。この遠藤の品種と中井の品種との間で重なるものは，鶺鴒とあざみこうじの2品種で，中井以後の文献にはあざみこうじは見当たらない。文献に最もしばしば表われたのは鶺鴒である。この品種は決して栽培がたやすいものではなく，起原層の編制替えにより全緑細葉になりやすいにもかかわらず，日本人の嗜好に合致し，注意して栽培されたからであろう。錦葉集時代から今日までつづいている。また，糸覆輪，紅雪，伊達錦，日の司，紅司は少くとも1915年以来，今日までつづいている。この2つの間の30年間に遠藤(1915)の用いた他の5品種は，すべて今日もつづいているのであるから，この5品種は中井(1943)の同定した46品種のいずれかに相当すると考えられるが，遠藤の用いた名前は今日も用いられているのに対して，中井の用いた品種名が，今日用いられていないので1:1の対合はなお困難である。

現在，筆者が生品を確認したものは54品種である。ガーデンライフの南弘氏の「南錦」の写真を加えると55品となる。ガーデンライフ編集部に問い合わせたが，南弘氏

の住所は未確認のため生品はみていない。また，宮沢の観賞樹木(上原より)や園芸大辞典(1971)にある有明，福寿，福包，覆輪，貴宝青がこれらの出版当時，確認されていたものとすれば，これからも探し出て栽培し，その変化などを研究できる可能性があるが，今回は1974年から1983年までに集めたものについて，その外形の概略を一覧表にして示し，昔の品種との相違を示す。

前述のように現在の品種は周縁キメラが多いが，文献には発生形態学的に周縁キメラの立場から，その各起原層の形質を記載したものは皆無である。周縁キメラの立場から見ることにより，異品種出現の一因となっている起原層の編制替と，起原層別におこる体細胞突然変異とについても注意を払うことにより，品種間の関係も一部解明された。

筆者の未確認の品種並びに新品種についての皆様の御教示を是非お願いする次第である。なお，各品種の詳細は後日「ヤブコウジの品種」(自費出版)に発表する予定である。

#### 材料と立場

前述のようにヤブコウジは我が国の自生種で，地下茎と種子とで繁殖するので，長年月の間には，各地で突然異がおこり，また，栽培中におこった突然変異は早期に見出され，野外では生育できないような形質のものまで多くの園芸品種がのこされた。①その葉形，姿勢 ②厚さ ③鋸歯の大小，方向，数 ④起原層の分担範囲の狭広 ⑤コンベの大小，多少 ⑥各起原層の色(白，うす黄白，黄，黄緑，緑黄，緑，のちざえ緑など ⑦アントシアンの濃淡 ⑧樹高などそれぞれに遺伝的と考えられる変異があり，また，⑥における各起原層における種々な組み合わせ，①～⑦の種々な組み合わせにより実に多くの形質のものが出現している。このうちでも園芸品種名のついていない枝変わりもある。

材料を与えられた山口県下松市(相本晃史)新潟，長尾草生園(長尾健次郎)，埼玉 やまさ園芸(関根富夫)，兵庫 山本創生園，ガーデン和光(若生真理)，大阪常盤園(松村繁三郎)，兵庫千秋園(藤本義文)の諸氏，また，文献の便を与えられた桜井元先生，京都大学理学部講師 村田源先生，終始御指導をいただいた法政大学理学博士 笠原基知治先生に対して感謝の意を表す。

色は新色名帳(200色)日本色彩社(1966)によった。



観察結果

現在栽培している品種について観察結果の概要を第4表に示した。

第4表 生 株 確 認 品 種 と そ の 形 質

品 種 名	葉 形 概 形	キメラ型	各 層 の 形 質
1 あさひにしき(朝日錦)	長大、先端、平滑	G M M	L I コンベ少数で小形, L II, L IIIは plastid 斑その g 部はのちざえ
2 あまのかわ(天の川)	中型, 葉縁不整	g G g	L I コンベ大形で多数, のちざえ白, L II 分担中~広, L IIIは表面靑淡黄緑色
3 いとにしき(糸 錦)	中型先端, 普通型	M g M	L I コンベ少数で小形, L II gは極めて狭い鮮やかな白, L III plastid 斑, その g 部はのちざえ
4 いとふくりん(糸覆輪)	中型先端, 普通型	G g G	葉形は糸縮と同様
5 うざわ(鶴 沢)	小型, 長厚, 先端, 整形	G G g	L I コンベ極めて少, 小, L II の分担は広い, L III gは葉身形成時の細胞分裂がおくれてGGとなりやすい
6 おうごんか(黄金花)	中小型, 表面平滑	G y G	L I コンベ普通大, L II 淡緑→黄, 分担は狭~中位, L III 緑
7 おたからにしき(御宝錦)	中丸型, 平滑, 整形	G G M	L I コンベ極めて少数, 中型, L II 分担狭~中位, L III のG部はL II より濃い緑でg部はのちざえ
8 かめのこ(亀の子)	中型, 葉縁不整	G (y) G	L I コンベ中量, L II 分担中幅, うす緑色, L III 緑
9 きかく(亀 鶴)	中狭型, 倒披針形, 不整	G g (g)	L I コンベ多く, 葉縁フリル状, L II 白は極めて狭い, L III 白緑~うす緑でいくつかの系統がある
10 きみがよ(君が代)	中型, 先端, 鶏冠よりねじれ強	g (y) G	L I コンベ少いが大きい, 淡黄→白, L II 分担は中~広, うす緑, L III 緑, いびつ葉縁
11 けいかん(鶏 冠)	中~大, 倒披針形, 不整	g (y) G	L I コンベは君が代より大, 黄→白, L II 分担は中程度, うす緑→黄, L III 分担は君が代, 不二より平滑
12 こうかん(紅 冠)	中型, 普通丸形, 整形	G (y) G	L I コンベ少いが大, L II 分担広い, 淡緑→黄緑, L III 緑が plastid 変異によりMの枝変りあり
13 こうきかん(高輝冠)	中~大, 普通, 平滑	G g G	L I コンベ少い小形, L II 分担中~広, 白色はとくに鮮やか, L III 緑いびつ
14 こうせつ(紅 雪)	大倒披針形, 平滑, 不整	g y G	L I コンベ中量, 大, 淡黄→白, L II 中, 淡緑→黄のちざえ, L III 緑いびつ
15 こうせつにしき(紅雪錦)	大倒披針形, 平滑, 不整	M y G	L I コンベ中量, その g 部はのちざえ, L II 中, 淡緑→黄のちざえ L III 緑いびつ
16 ごこうにしき(御幸錦)	小普通形, 平滑, 整形	M M M	L I コンベ極小, 種子実生起源か みゆきにしきともいう
17 こしのはな(越 花)	中~大, 葉縁不整	G g' g'	L I コンベは中量, 大形, 網干のL I g'が安定緑となったものか, 核内の易変性白色遺伝子による



18	ごしょぐぐるま(御所車)	小～中, 先尖, 不整	G g G	L I コンベ中量, 中大, L II 極めて狭く, 白は鮮やか, L III 緑いびつ
19	ごしょにしき(御所錦)	小～中, 先尖, 不整	M g G	御所車のL I G→M plastid 突然変異, そのg部は黄緑→黄, L II 白極めて狭い, L III 緑いびつ
20	しののめ(東雲)	小長狭厚型, 先尖, 平滑	(M) M M	あるいはGMM, L I のコンベ不明, L II, L III はいずれもGとgとの区分, そのg部はのちざえ白
21	しらふちりめん(白斑縮緬)	狭長, 先尖, 表面しわ多, 突起あり	M M M	黄斑縮緬と同一品, 実生起原か, L II, L III はGとgとの区分, gは初期に黄である
22	しらゆき(白雪)	小普通型, 先尖, 平滑	y g G	L I コンベ極めて少, 小, 淡黄色, L II 分担中～広, 葉縁は白, L III 緑いびつ
23	たかさご(高砂)	中～大倒披針形, 不整	G g <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">g</span>	L I コンベはL III の緑より濃い, コンベは多いが亀鶴より小, L II 緑, 分担中～狭, L III 白縁から縁へ
24	だて(伊達)	中～大形, 披針形, 不整	g g G	L I コンベ中量, 黄→白, L II 極めて狭い, L III 緑, 多少いびつ
25	だてにしき(伊達錦)	中～大形, 披針形, 不整	M g G	L I コンベ中量, のちGとgとに染分け, そのg部はのちざえ白, L II 極めて狭い
26	ちよだ(千代田)	中形, 倒披針形, 平滑	G g G	L I コンベ中～多量, 葉縁不整, L II 狭く, 白は鮮やか, L III 緑, いびつ
27	ちりめん(縮緬)	狭長, 先尖, 表面ちぢれ	G G G	非メメラ又はL I に奇形要素をもつか, 葉表や葉縁には不規則な小突起のみられる
28	てんきんしょう(天錦章)	御所車系統, 倒披針形	G g M	てんしょうにしき(天照錦)と同品, 御所車のL III のMとなったもの, 葉縁いびつ, L II 狭白, L III Gとgに分れるgは淡緑→白
29	てんこうにしき(天光錦)	狭長厚形, 先尖, 平滑	G g M	L I コンベ小形, 多～中量, L II 超狭形, L III plastid くさび型の緑と白の条みえる
30	なみのひかり(浪の光)	中形, 倒披針形, 支脈に沿い凹凸	G G G	色素性のキメラではないが, 初期には葉縁がよくのびて中央部に凹凸がでる
31	にじのひかり(虹の光)	大形, 普通形, 平滑, 整形	<span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">g</span> <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">g</span> <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">g</span>	亀鶴, 高砂の枝変わりより出現, 初期には淡いピンクを交えた淡緑色でのち緑色となる独立株は枯花しやすい, ひかり班の型
32	はくおうかん(白王冠)	中～大形, 鋸歯平面方向に出る	G g G	L I コンベ少く小形, L II 分担中～広, 黄→白のちざえ, L III 緑, いびつ
33	はくおうでん(白王殿)	前者より葉長い, 先尖	G g G	L I コンベ中量少数, L II 分担中～広, L III 緑, いびつ, 前者より緑多少淡い
34	はくおうにしき(白王錦)	中形, 普通, 鋸歯平面方向に出る	G M M	又はGMG, L I コンベ極めて少, L II, L III MはそのG部は濃緑, g部はのちざえ白
35	はくぼたん(白牡丹)	白王冠に似るが, 鋸歯下向	G g G	L I コンベ少く小形, L II 分担中, L III 緑, いびつ, 支脈に沿って凹凸あり
36	はなぐるま(花車)	中～小形, 先尖, 不整	y g G	L I コンベ中量, 中～大, 淡緑→淡黄, 著しいのちざえ, L II 極めて狭い, 鮮かな白, L III 緑, いびつ

37	ひのつかさ(日の司)	中形, 細狭長, 厚先端	g g G	L I コンペ中〜大, 中量, のちざえ, L II 超狭, 白, L III 緑
38	ひの で(日の出)	大形, 普通形, 整形	g G g	L I コンペ小, 少数, L II 分担広い, L III 表面靫帯緑黄色
39	びわにしき(枇杷錦)	白王冠に似るが, 鋸齒小	G g G	にしき(錦)の部分が不明, L I コンペ比較的少, L II 分担中, 鮮かな白, L III 緑, いびつ
40	ふじ(不二)	中形, 表面凹凸し, さじ状, 不整	g y G	君が代と鶏冠との形質をさらにいびつにした外形, L II 分担最も狭く, 節間最も短い
41	べにつかさ(紅司)	大形, 倒披針形, 不整	G y G	L I コンペ中〜多, L II 分担中, 淡緑→黄のちざえ, L III 緑, いびつ
42	ほうか(宝冠)	中普通形, 先丸, 平滑, 整形	G G g	L I コンペの緑はL II より色が淡色, 極めて少, 大きさは中, L II 分担広, 多少赤味ある, L III 表面靫帯黄緑白, 狭い
43	ほうかんにしき(宝冠錦)	中普通形, 先丸, 平滑, 整形	G G M	L I コンペ緑はL II よりも淡色, 極めて少く, 中の大きさ, L II は普通緑, L III は plastid 性斑
44	ほしあみ(干綱)	小型, 白のあみめ斑, 整形	g' g' g'	種子発生起原によるか, 表現からみて, G→g', 核内の緑色遺伝子が易変性白色遺伝子に変化したものと考えられる
45	ほまれ(誉)	長大, 平滑, 葉縁不整	G g G	L I コンペ少く, 小形, L II 極めて狭い, 時にはL II の広い丸形葉を出す, L III 緑いびつ
46	ほまれにしき(誉錦)	長大, 平滑, 葉縁不整	G g M	L I コンペ少く小形, L II 極めて狭い, L III はMでそのG部とg部(のちざえ白)とはくさび形となる
47	まいご(舞衣)	中, 短形, 葉面やや平滑	G g G	L I コンペ中量, 小形, L II 分担中, 白, L III 緑, いびつ
48	まつしま(松島)	狭長小, 倒披針形	G g g	L I コンペ多量中大, 葉縁は波型, L II 極めて狭, 白, L III 狭い, 白→多少くらむが亀鶴より明るい。
49	みかさにしき(三笠錦)	普通, 中〜小, ねじれ強, 先端	(M) M G	又は(M)MM, L I はみとどけていない, 現在枯死, L II 分担中〜広, G部は淡緑→緑, g部は淡緑→白
50	みかど(帝)	狭, 長, 厚, 先端, 葉縁不整	G y G	L I コンペ多量中〜大, 葉縁は液型, L II 超狭型, 白黄, L III 緑
51	みねのゆき(峰の雪)	中形, 倒披針形, 先端	G g G	L I コンペ少量, 中〜大, L II 分担中〜小, L III 緑, いびつ
52	みほのまつ(三保の松)	中丸形, 平滑, 葉縁整形	G G g	L I コンペ少量, 大形, L II 分担, 中形, L III 白であるが, 表面靫帯は黄緑色
53	みよにしき(御代錦)	大丸形, 厚, 平滑, 整形	(M) M M	L I コンペ不明, (M)MGの枝も極く普通, L II 分担広, G部は濃緑, g部はのちざえ白
54	やし(八州)	中〜小形, 倒披針形, ねじれ, 先端	y g G	八島ともかく, L I コンペ少, 小, うす黄, L II 狭, L III 緑, いびつ

以上のほか枝変りの型が多数出ているが今回はこれに触れずにとどめた。

第4表のキメラ型に用いた記号は、右からL I, L II, L IIIの表現型を記号化したものである。Gは緑色, gは無色(外観白色), yは黄色, (y)は淡緑~黄緑, [g]は後に淡緑になる無(白)色をあらわした。またMはplastid性の斑を出現するもので出現はじめは一樣に黄緑色でのちに緑部と白部に染出される。すなわち緑部はG, 白部はgであらわされる色で, MはGとgとのモザイクである。これに対してg'は核内遺伝子である易変性白色遺伝子が葉身の形態形成の途上にg→Gへしはば突然変異する性質のものをあらわした。

### 引用文献

- 1 金太(1827)草木奇品家雅見
- 2 水野忠暁(1829)草木錦葉集
- 3 遠藤保太郎(1915)斑入り葉の研究(卒業論文)
- 4 中井猛之進(1943)大日本植物誌 第9巻 ヤマタチバナ

### 追記

復刻本 花木園芸(1940)宮沢文吾について

宮沢文吾の「観賞樹木」に記載されているというヤブコウジ22品種について、元来、上原敬二の樹木大図説Ⅲのp. 605に表が記載されていた。そこで、宮沢文吾の書物を直接見るべく探していた所、最近、宮沢文吾の「花木園芸」の復刻本が出たので、早速入手して、何か「観賞樹木」の書物の手がかりを期待したが不明であった。ところが「花木園芸」のp. 512~523のヤブコウジの項に、品種についてのべた内容があり、略記すると次のようになる。

1. 明治28年(1895)東京北口社、紫金牛銘鑑には貴品7, 全盛7, 逸品8, その他銘品48品あり。
2. (年数不明)日本園芸雑誌65号p. 23に紫金牛集彙の中に90品種あり。
3. 明治31年(1898)日本園芸(号数不明)p. 85には77品種、鈴木政之助が記載した、日の司、七福神、千網、司覆輪、甲竜縮緬、東雲は有名であるという。

- 5 宮沢文吾(1961, 上原, 樹木大図説Ⅲ p. 605)観賞樹木
- 6 長尾健次郎(1967)総合種苗ガイド 古典園芸植物編
- 7 岡村はた(1976)植物の斑入り発現様式の研究
- 8 北村四郎 塚本洋太郎(1977)草木錦葉集復刻本並び解説 青々堂(現代品種との対比は横井政人, 広瀬嘉道による)
- 9 同編集委員会(1977)最近園芸大辞典 誠文堂新光社
- 10 やまさ, 長尾, 阪田(1980~81)園芸植物カタログの中のヤブコウジ
- 11 南弘(1981)ヤブコウジその品種と栽培 ガーデンライフ
- 12 岡村はた(1981)斑入り植物の話 兵庫生物 Vol. 8 No. 2

4. 明治33年(1900)日本園芸105号p. 55には、品種は100種に至るとある。
5. 昭和7年(1932)実際園芸第13巻2号(浅井敬太郎)は22品種について、写真をあげ詳細な解説があるという。天乃川, 有明, 朝日錦, 紅司, 千代田, 不二, 福寿, 福包, 白牡丹, 花車, 日乃出, 日司, 覆輪, 君ヶ代, 紅雪, 舞衣, 松島, 峯雪, 御代錦, 黄金花, 八島, 白斑縮緬  
以上のことを述べている。

6. なお、花木園芸(1940)には花車(p. 513), 揚羽(p. 517), 青宝司(p. 521)の写真がある。復刻本であり、原色でないので不鮮明ではあるが、揚羽は枇杷錦, 白王冠に類似し、青宝司は高砂, 亀鶴に類似している。

1~6を通観すると、3の七福神, 司覆輪, 甲竜縮緬, 6の揚羽, 青宝司の計5個が新たな名として浮び上がった。将来、1~5の文献に直接当り、現在の品種名と文献に出てくる品種名との間の関係を究明する所存である。